

49%, PAPでは57%, 91%, 51%で, Sensitivityでは γ Smが最も優れるが, SpecificityはPAPが勝り, EfficiencyはPAが優れていた。

17. 前立腺癌の経過観察における骨スキャンとPAP測定の価値

相澤 卓 松本 哲夫 間宮 良美
三木 誠 (東京医大・泌)

抗男性ホルモン療法を中心として治療した過去5年間の前立腺癌87例のうち, 骨シンチグラフィを2回以上実施し, かつPAP・RIAでも経過を追跡できたのは30症例である。

これらの例で一定期間の前後で骨シンチを対比できる単位(2回実施は1単位, 3回実施は2単位とし)について, 骨シンチとPAP値を対比検討した。

PAPの変動と骨シンチの変化が一致したのは, 50単位中27単位54%であった。しかし, PAPの変動が1~2か月で10 ng/ml以上あったものに限定すると, 骨シンチの変化との一致率は70.6%で認められた。特に短期間に10 ng/ml以上PAP値が上昇した場合はすべて骨シンチも悪化していた。いわゆるflare phenomenonはわずか3.3%でみられたのみであった。

前立腺癌の経過観察に当っては, PAPなどの腫瘍マーカーを1~2か月ごとに検査し, それが急上昇した時または強い臨床症状が出たときのみシンチグラフィを実施すればよい。

18. 骨シンチグラフィにおける肋骨の早期骨転移所見の検討

養島 聡 岡田 淳一 有水 昇
(千葉大・放)

19. 髄芽細胞腫患者における骨シンチグラフィ

小須田 茂 鎌田 憲子 鈴木 謙三
(都立駒込病院・放)

Medulloblastomaは小児小脳虫部に好発する未分化腫瘍であるが, 骨転移例に遭遇することはまれである。最近, 3例のMedulloblastoma患者に骨シンチを施行し, 2例に異常集積を認めた。1例はいわゆるsuper bone

scanを示し, レントゲン写真上, びまん性の造骨性変化を認めた。

Medulloblastomaに対する各種治療法の進歩により, 患者の生存率は向上している。長期生存例に頭蓋外転移の生じる危険性が高いとすると, 骨転移が最も高頻度であり, 患者の経過観察に骨シンチは有用と考えられた。

20. MFHに対する ^{67}Ga シンチグラフィの有用性について

太田 洋 尾崎 裕 雨宮 謙
竹内 信良 白形 彰宏 玉本 文彦
住 幸治 片山 仁

(順天堂浦安病院・放)

malignant fibrous histiocytoma(以下MFH)は, 中年の四肢および後腹膜に好発する軟部組織由来の悪性腫瘍である。今回, 手術および培養で病理学的にMFHと診断された5例について, ^{67}Ga シンチグラフィの有用性を各種画像診断と比較検討した。MFHは, その病理組織像の多彩さを反映して, 画像診断の所見も多彩で決め手となる所見に乏しかった。その中で, ^{67}Ga シンチグラフィは, これのみで質的診断は困難なものの4例中3例で集積しており, 特に病巣の広がりや治療後の経過観察に有用であると思われた。

21. 仙骨 chordoma 3 症例の骨シンチ・Ga シンチ

小野 慈 (神奈川県立がんせ・核)
櫛田 和義 (同・整外)
猪狩 秀則 (横浜市大・放)

chordomaは胎生期の脊索の遺残から発生する悪性の骨腫瘍であるが, 発症頻度の低いことも関係して, 核医学的所見の報告は少ない。最近3年間に3例のchordomaを経験したので骨シンチ, Gaシンチを中心に報告した。

全例男性, 年齢は54歳, 63歳, 86歳。初診時の腫瘍の大きさはおおの17×15×14, 7×7×5, 15×15×13 cmを示した。骨シンチでは腫瘍自体への集積は乏しく63歳例では正常骨より低く, いわゆるcoldを呈していた。Gaシンチでは腫瘍の集積性は低く86歳例ではcoldを示した。骨盤内に腫瘍は発育するため腸管内Gaの残存は増加し, 圧迫, 偏位の同定が必要となった。骨シン